

使徒言行録15章22節—16章10節

『福音を告げ知らせる』

今日はとても長い聖書箇所になりました。これを全部細部にわたって解き明かすことはできませんし、しません。いくつかのことをご一緒に聞いていきたいと思います。

エルサレムで行われた教会会議では、エルサレムの教会の者たちが異邦人(ユダヤ人から見ての外国人)に割礼を受けることを強要しない、律法を守ることも求めない、異邦人を悩ませてはいけない、というペトロ、ヤコブの言葉で一つの決着を見ました。最後にヤコブは決着を見たことの内容と、しかしこれだけは守ってほしい、というものを手紙にしたため、それをユダとシラスというエルサレム教会で重きをなす人に託しました。そして、アンティオキア教会までその手紙を二人が届け、みんなの前で読み、教会を励ましたのです。先週も申し上げたように、こういう形で会議は終わり、その決着については報告されたのですが、すべてが丸く収まったのかどうかはわかりません。実際にはユダヤ人中心のエルサレム教会は今後も割礼を大事にするし、律法も大事に守っていくのです。そのことは変わらない。ただ外国人の多いアンティオキア教会ではそれを強要する必要はないよ、と言っているのですから。会議の最後に語ったヤコブの発言は調停的だったと言いましたが、問題の根本的な解決ではなかったと言えます。しかし事実として教会の中で、福音をめぐる対立や論争がおこり、そのための協議がなされていったということは記憶すべきことです。

福音が語られる、それは真空状態で語られる、ということはないのです。よく聞く話ですが、ハトが空を飛ぶ、空気という抵抗があってそれが重いと鳩が言うのです。しかし、実際真空状態になったら鳩は飛べないのです。飛ぶということは、空気という抵抗があってはじめて可能になるのです。福音もどこかに飾ってあるだけならともかく、それが語られる、ということは空気という抵抗に遭うのです。抵抗に遭わないということはない。抵抗とは、たんに反対とか、反発という意味だけでない、外から加わる力に対してそれに反作用する力のことです。語られるその相手の生きる社会、文化、環境、政治、宗教。そういうさまざまな抵抗に遭うのです。当然です。そしてその抵抗の中で、ハトが空を飛ぶように、福音は語り継がれていくのです。

抵抗は、あるときは妨害というような露骨なものであったり、あるときは理解、了解を示しつつも根本的には受け入れない、という具合に、複雑な形をと

っていきます。アンティオキア教会とエルサレム教会で起こった対立や論争も、単にトラブル、というようなことではない、と思います。教会の中であっても福音を語ることで抵抗は起こってくるのです。もっと言えば、わたしたち一人一人が福音に聞く時、抵抗していく。自分の常識や自分の考えと福音がぶつかって、抵抗していくのです。エルサレム教会は、ある意味福音をそのままに受け取ることに抵抗しているのではないか。

さて、パウロはバルナバに「さあ、前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し、どのようにしているかを見てこようではないか。」と提案して、伝道旅行に再び出かけようとしています。ところがここで、問題が起こります。バルナバはマルコと呼ばれるヨハネを連れていきたいと思ったのですが、パウロはそれに反対しました。ヨハネは以前伝道旅行の途中で帰ってしまった、というのがその理由でした。この連れていく行かないは、激しい衝突を生んだというのです。「激しい衝突」という言葉に驚きます。パウロとバルナバ、この二人は盟友と言っていい間柄です。パウロがキリスト者になった時、ユダヤ人教会で受け入れられなかった、その間を取り持ったのはバルナバでした。そして第一次伝道旅行においても二人は苦楽を共にしたのです。その二人の間で激しい衝突があったというのです。その理由については簡単には判断できない。というのも、使徒言行録だけ読めば、ここにあるように、ヨハネを連れていくかどうかということでの衝突なのですが、パウロの手紙を読むと、別の見方も出てくるのです。それは、衝突の理由はヨハネにあるのではなく、バルナバにこそパウロは問題を感じていたかもしれない、という見方です。パウロの手紙によれば、バルナバも、異邦人と一緒に食事することに躊躇を示した、それを「偽善に引きずり込まれた」というふうに言っている。このことをめぐっては多様な判断があります。それはもう過去のこと、そんなこといつまでもパウロは引きずっていないだろう、という人もいます。しかし、わたしはそうは思わない。パウロはバルナバのことを信頼していただけに、この出来事は深く心に突き刺さったのではないか。

パウロはキリストに出会って、自分から出発しない生き方へと転換させられた。自分の出自、ユダヤ人であるのかないのか、割礼を受けているかどうか、律法を守っているかどうか、そういうことから出発しない、ただキリストの十字架と復活の救いから生き始める、それが福音が招きだしてくれる世界だということをパウロは経験していた。そこから歩みだすのが教会だとパウロは受けとめていた。

キリストの体の中にあるわたし、そこから生きる、ということです。パウロからすればバルナバの異邦人と一緒に食事をしない、ということは福音から生きようとするものではない。パウロはここでバルナバと別れ、別々の道に行くことにする。これは喧嘩別れをした、ということではない。パウロは後に手紙の中でも、バルナバやヨハネに対する敬意を示しています。しかし、自分は自分が示された福音をそのままに伝えたい、という思いがあったのでしょうか。

パウロは協力者としてシラスを選び、第2次の伝道旅行に出発します。途中リストラの町でテモテという弟子を得て、以後共に歩いていった。テモテにパウロが割礼を授けたことを不思議に思う人がいると思いますが、これは言うまでもなく、救われるために割礼を受けたのではなく、ユダヤ人の母の息子として、ユダヤ人の一員としての儀礼をした、ということでしょう。パウロはユダヤのしきたりをすべて否定する生き方をしたわけではないことは言うまでもないことです。キリストから生きる、そこから律法を生きる人がいることは否定するものではないのです。

さて、伝道旅行を始めた一行はアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられた、というのです。またミシア地方の近くまで行き、ピティニア州に入ろうとしたがイエスの霊がそれを赦さなかった、というのです。これは、何らかの事情でパウロたちが計画した伝道の道が頓挫した、できなかった、ということです。パウロはバルナバと別れ、おそらくは満を持して自分の計画を立て、伝道旅行を始めた。しかしその自分の立てた計画が計画通りには進まなかった。断念せざるを得ないことが一再ならず出てきた。それはパウロにとって、シラス、テモテら一行にとって暗礁に乗り上げるようなことだった。どんな思いだったのか。

パウロはその夜幻を見ました。その中で、一人のマケドニア人が立って、「マケドニア州にわたってきて、わたしたちを助けてください。」と願うのをパウロは見聞きしたのです。パウロはこの幻を見て、彼らに福音を伝道するためにわたしたちは召されているのだ、ということを確認するのです。

どうしてパウロは幻を見たのか、ということを考えてみると、自分の計画が行き詰ったことと無関係ではないだろうと思います。自分の計画が行き詰ったところは、主の計画がどこにあるのか、あらためて心を開くときです。行き詰って、そこで自分の思いに固執するのではなく、主から示されるものに思いを

委ねていく。聖霊から禁じられた、イエスの霊がそれを赦さなかった、という表現は自分の計画は断念せざる得なかったが、そこに主の計画が示されていくのではないか、というパウロの信仰が語られている。

パウロが幻を見たのは、自分の考えに拘泥するのではなく、主が道を拓いてくださることを願い祈り、心を開いていったことと深く関係しているのではないか。

行くことを禁じた聖霊は、行く道を示してくれる聖霊でもあるはずだと、パウロは受けとめていたのではないか。

一行はマケドニアに向かって出発するのです。

使徒言行録は教会の伝道の歩みを書き記します。福音を告げ知らせる。そこで抵抗が起こってくる。それは避けようもない。ユダヤ教からも、教会の中からも抵抗が起こってくる。もちろん福音を聞いた一人一人からも抵抗が起こってくる。それはとてもやっかいなことです。福音を聞いたつもりになって、福音ではないものによって生きようとする人も出てくる。パウロ自身も自分の思いを貫いていく、という自分の中の抵抗と出会ったと思います。しかし福音から生きることは自分の思いを貫いていくことでも、自分の思うとおりに生きることでもない。聖霊の働きを信じて、神の導きに委ねながら歩いていく、それが福音から生きること。決まりきった正解があるわけでもない。ただそのときどき、福音から生きるということに心に向けていくことが大事なのです。